『元朝秘史』のモンゴル語漢字音訳における特殊表記方式について

―『元朝秘史』四部叢刊本に基づく考察―

孟　達　来

はじめに
１．漢字音訳における特殊表記方式の種類
２．対象となる音が漢字の原音で精確に表記できない場合
３．モンゴル語音節末子音への対応
おわりに

はじめに

漢字音訳とは、歴史上、漢語の周辺諸言語の表記に長らく用いられてきた表記方式である。モンゴル語を対象とした漢字音訳に関しても、幾つかの文献が成立しており、そのうち、量的に一番多く、且つ音訳漢字の用法の面で大きな特徴をもつのが『元朝秘史』[1]である。

『元朝秘史』の音訳漢字とモンゴル語音韻に関する従来の研究において、音訳における特殊表記の問題が扱われてきた（服部四郎 1946、越智サユリ 2003 など）。また、特殊表記に関連した研究として、栗林均（2003）、更科慎一（2003）、中村雅之（2003）等による『元朝秘史』とほぼ同時代に成立したとされる『華夷訳語』の研究がある。但し、本稿で扱うような『元朝秘史』のモンゴル語を中心とした漢字音訳における特殊表記について、例を網羅的に調査し、個別に取り上げた研究は見られない。

そこで、本稿では、『元朝秘史』のモンゴル語漢字音訳における特殊表記の問題を専らに取り上げ、コーパスを用いて、『元朝秘史』の全巻に亘る特殊表記の用例を網羅的に調査し、漢字音訳における特殊表記方式の規則性を明らかにする。

なお、本研究に用いるコーパスは、音訳漢字と、表記されたモンゴル語音との対応関係

1　『元朝秘史』の原本は、13 世紀にウイグル式モンゴル文字で書かれたとされる。しかし、その原典は今までに伝わらず、現存するのは 14 世紀後半に漢字で音訳され、『元朝秘史』と名付けられたものである。

を含めたパラレルコーパスである。コーパス作成に用いたのは、『元朝秘史』の諸本[2]のうち、誤りが一番少ないとされる四部叢刊本（12 巻本）である。

1．漢字音訳における特殊表記方式の種類

モンゴル語の漢字音訳を議論する前に、まず、漢語音と漢字の関係について簡単に説明しておきたい。

漢語の伝統音韻学においては、漢字 1 字の音が「声母･韻母／声調」に分けられる。「声母」は頭子音のことである。「韻母」は、更に「介音－主母音－韻尾」に分けられる。音節構造の観点からすれば、漢字 1 字の音は最大 CVC であり、この CVC と「声母・韻母」の関係は「C_1（声母）－ VC_2（韻母）」となる。

そこで、漢字による音表記の一番理想的な方式は、漢字の音節構造の特徴を利用し、漢字 1 字の原音で、漢字の（C)V(C）の音節構造に対音させる方法であるといえる。このような方法を筆者は「通常表記方式」と称する。

だが、実際には漢語と音訳される語の全ての音が一対一に対応するわけではない。音訳される語には、漢字の原音では表しきれない音声が存在したり、漢字 1 字の（C)V(C）音節構造で表しきれない音節が存在したりする。こうした場合、上述の「通常表記方式」では、対象となる音を精確に表記できない。そこで、より精確な音表記をするために、「通常表記方式」以外の表記方式が求められる。本稿では、この「通常表記方式」以外の表記方式を「特殊表記方式」と称する。

『元朝秘史』のモンゴル語漢字音訳では、当時の音訳者による表記方式に関する説明がなされていない。一方､『元朝秘史』と同時代に編纂されたとされる『華夷訳語』（甲種本）[3]は､音訳の面で『元朝秘史』と極めて類似するものであるが､『華夷訳語』（甲種本）の「凡例」には、当時の漢字音で精確に表しきれないモンゴル語音をどのように表記したか、つ

2　現存する『元朝秘史』の諸本は「12 巻本」と「15 巻本」という二つの系統に分けられる。「12 巻本」には「顧広圻本」と「葉徳輝本」という二種がある。「顧広圻本」は、『四部叢刊』に収録されているため、「四部叢刊本」とも称される。「15 巻本」は『永楽大典』に収録されたものであり、それには銭大昕が書いた「跋」があるため、「銭大昕本」とも称される。

3　『華夷訳語』（甲種本）は、1382 年（洪武 15 年）に明朝の翰林院侍講の火源潔、同編修馬沙亦黒らによって編纂された漢語とモンゴル語の対訳語彙・文例集である。本稿では、栗林均（2003）において刊行された甲種本『華夷訳語』（『涵芬樓祕笈』第四集）を参照する。

まり「特殊表記方式」について幾つかの説明がなされている[4]。

『華夷訳語』の「凡例」は全６条で、第１～３条は、発音補助記号として用いられた「中」「舌」「丁」についての説明であり、第４～６条は、音節末子音 l, q, t, k, b の表記に関する説明である。また、『華夷訳語』の「凡例」の全６条のうち、第３条（発音補助記号「丁」）以外の項目は、『元朝秘史』の漢字表記にも用いられた手法である。『元朝秘史』と『華夷訳語』の音訳方法は類似点が多々あり、『華夷訳語』の凡例は、『元朝秘史』においても参考にできるものである。

『元朝秘史』において特殊表記が用いられる理由には、モンゴル語音と漢字との対応関係の観点から、（１）表記の対象となる音が漢字の原音で精確に表記できない、（２）表記の対象となる音が漢語の音節構造の枠内で表しきれない、といった二つがある。

以下では、特殊表記方式について、上述の（１）、（２）の二通りの場合を考察していく。

２．対象となる音が漢字の原音で精確に表記できない場合[5]

『元朝秘史』が音訳された当時の漢語には、モンゴル語の破裂音 q と、ふるえ音 r とに一致する子音が存在しない。音訳では、モンゴル語の頭子音 q と r の音声をより精確に表すため、声母が x 又は k^h, k である漢字の左側に小書きの「中」を付けて、モンゴル語の破裂音 q を表し、声母が l である漢字の左側に小書きの「舌」を付けて、モンゴル語のふるえ音 r を表すのである。但し、実際には、用いられる「中」付き漢字と、「舌」付き漢字が、頭子音 q と、頭子音 r だけの表記に限らず、それ以外の音の表記にも用いられる場合がある。

以下では、「中」付き漢字による表記と、「舌」付き漢字による表記について検討する。

（１）モンゴル語声母 q への対応

『元朝秘史』の全巻に亘って、モンゴル語声母 q を小書きの「中」を付けて表す全例は 6568 回現れるが、そのうち、漢語声母 x に「中」を付けて表すのは 6539 回であり、全例

4　『華夷訳語』（甲種本）の「凡例」には次の項目がある。

一。字傍小注中字者。乃喉内音也。如中合中忽之類。

一。字傍小注舌字者。乃舌頭音也。必彈舌讀之。如舌児舌里舌剌舌魯舌侖之類。

一。字傍小注丁字者。乃頂舌音也。以舌尖頂上齶鄂音讀之。如丁溫丁兀丁豁丁斡之類。

一。字下小注勒字者。亦與頂舌同。如冰呼莫勒孫之類。

一。字下小注黑字惕字克字者。皆急讀帶過音也。不用讀出。

一。字下小注卜字必字者。皆急讀合口音也。亦不用讀出。

5　本稿では、モンゴル語と漢語の音の対応を同じ基準で議論するため、モンゴル語音のローマ字転写を IPA に変換している。但し、コーパスにおいて、モンゴル語はローマ字転写になっているため、コーパスから抽出したデータに関しては、ローマ字転写のままで用いることにする。

の 99.56％を占め、漢語の声母 k^h や声母 k に小書きの「中」を付けて表すのは 29 回であり、全例のわずか 0.44％を占める。

なお、モンゴル語の声母 q の表記には、全 22 種類の漢字が用いられ、これらの漢字は以下の二つのグループに分けられる。

①声母が摩擦音 x である漢字[6]

中合（xo）、中孩（xai）、中海（xai）、中含（xam）、中罕（xan）、中豁（xuo）[7]、中火（xuo）、中晃（xuaŋ）、中荒（xuaŋ）、中忽（xu）、中灰（xui）、中渾（xun）

②声母が破裂音 k^h または k である漢字

中康（k^haŋ）、中帢（k^hia）[8]、中［窟＋鳥］（k^hu）[9]、中窟（k^hu）、中坤（k^hun）、中干（kan）、中管（kon）、中鶤（kun）[10]、中崑（kun）[11]、中昆（kun）

以下では、上の（１）に示した①と②の漢字と表記されるモンゴル語音との対応について分析してみる。

１）「モンゴル語声母 q → （中）（漢語声母 x）」について

『元朝秘史』の全巻を通じて、「モンゴル語声母 q → （中）（漢語声母 x）」といった対応の内訳は、次の表１の通りである。

表１の対応事例が示すように、音訳において、一致音が漢語の声母に存在しないモンゴル語の声母 q をより精確に表すため、音声上近似する漢語声母 x に、発音記号の機能を果たす小書きの「中」を付けて表すのである。一方、コーパスに基づく分析によれば、モンゴル語声母 q を漢語声母 x に小書きの「中」を付けて表すケースは圧倒的に多く現れる。よって、「モンゴル語声母 q → （中）（漢語声母 x）」は、モンゴル語の声母 q の表記のデフォルト方法であるとみることができる。もし、Cm でモンゴル語の声母を表し、Cc で漢語

---

6 『元朝秘史』における音訳漢字の原音の推定については、基本的に Halliday（1959）に基づいているが、杨耐思（1981）、服部四郎（1946）も参照にしている。

7 「豁」は『中原音韻』に現れないが、『中州音韻』には「歌戈韻」とされ、『蒙古字韻』には「歌韻曉匣合母」とされているので、原音を xuo と推定する。

8 「帢」は『中原音韻』に存在しないが、『蒙古字韻』には「麻韻溪母」と記されているので、原音を k^hia と推定する。

9 「［窟＋鳥］」は意味表示のために造られた形声字であり、「窟」が音符、「鳥」が意符である。よって、原音の推定は「窟」に従う。「［窟＋鳥］」という表記に関しては、左側が「窟」、右側が「鳥」である漢字はパソコンで出せないため、それを「［窟＋鳥］」という組み合わせ漢字で表すことにする。なお、本稿に用いられる組み合わせ漢字に関しては、最終頁の「付録［２］」を参照されたい。

10 「鶤」は『中原音韻』に現れず、『蒙古字韻』には「真韻見母」と記してあるため、原音を kun と推定する。

11 「崑」は『中原音韻』に存在せず、『蒙古字韻』には「真韻見母」と記録しているので、原音を kun と推定する。

の声母を表せば、前述の表記方式を次の公式で示すことができる[12]。

Cm/q/ → (中)(Cc/x/)

2)「モンゴル語声母 q → (中)(漢語声母 k^h, k)」について

一方、モンゴル語の声母 q の表記において、音声上近似する漢語声母 k^h 又は k に発音記号「中」を付けて対応するケースも見られる。こうした対応の内訳は次の表2の通りである。

上に述べたように、モンゴル語声母 q を小書きの「中」を付けて表す全例は 6568 回現れるが、そのうち、「モンゴル語声母 q → (中)(漢語声母 x)」という表記は 6539 回であり、全例の 99.56％を占め、圧倒的に多く現れる。これに対して、「モンゴル語声母 q → (中)(漢

表1.「モンゴル語声母 q →(中)(漢語声母 x)」

	モ音→漢音	声母対応	韻母対応	漢字
1	qa→(中)xo	q→(中)x	a→o	中合
2	qai→(中)xai	q→(中)x	ai→ai	中孩, 中海
3	qam→(中)xam	q→(中)x	am→am	中含
4	qan→(中)xan	q→(中)x	an→an	中罕
5	qo→(中)xuo	q→(中)x	o→uo	中豁, 中火
6	qoŋ→(中)xuaŋ	q→(中)x	oŋ→uaŋ	中晃, 中荒
7	qu→(中)xu	q→(中)x	u→u	中忽
8	qui→(中)xui	q→(中)x	ui→ui	中灰
9	qun→(中)xun	q→(中)x	un→un	中渾

表2.「モンゴル語声母 q →(中)(漢語声母 k^h, k)」

	モ音→漢音	声母対応	韻母対応	漢字
1	qa→(中)k^hia	q→(中)k^h	a→ia	中帢
2	qaŋ→(中)k^haŋ	q→(中)k^h	aŋ→aŋ	中康
3	qon→(中)kuan	q→(中)k	on→uan	中管
4	qan→(中)kan	q→(中)k	an→an	中干
5	qu→(中)k^hu	q→(中)k^h	u→u	中窟, 中[窟+鳥]
6	qun→(中)k^hun	q→(中)k^h	un→un	中坤
7	qun→(中)kun	q→(中)k	un→un	中昆, 中崑, 中鶤

12　以下、音対応の公式において次のような略号を使う。「声母（Initial Consonant）：漢語＝ Cc；モンゴル語＝ Cm」「韻母（Final）：漢語＝ Fc；モンゴル語＝ Fm」「韻尾（Ending）：漢語 Ec；モンゴル語 Em」。

語声母 k^h, k)」という表記は 29 回現れ、全例のわずか 0.44％である。それでは、なぜ声母 k^h と声母 k も用いるのか。以下では、漢語の声母 k^h と声母 k による対応について分析してみる。

①「qa →中帢（k^hia)」に関して、qa の表記に一般には「中合」(3187 回）が用いられるが、「帽子」を意味する maqalai という語の表記に 1 回だけ「中帢」が用いられている。用例：「ma|qa|lai|tu 馬 | 中帢 | 来 | 禿 [13] ／傍訳：帽児有的」(3；23/8-24/3)[14]。服部四郎（1946）では、「中帢」を「中合」の誤字とするが、陳垣（1934）では、意味に関連する漢字であるとする。確かに、「帽子」を表す語の音訳に「巾」偏の「帢」を用いているのは、意味にも合わせるためであろうと考えられる。

②「qu →中窟（k^hu)」は、巻 3 において 3 回現れるが、全て「潜り込む」を意味する širqu- という語幹の表記に使われる。用例：「ši|r|qu|su 石 | 児 | 中窟 | 速／傍訳：鑽入」。よって、qu の表記に一般に用いられる「中忽（xu)」(1269 回）に対して、「中窟」は širqu- という語幹のみに用いられた文字であると見ることができる。

③「qu →中［窟 + 鳥］(k^hu)」は巻 3 において現れ、鳥類の名の表記にのみ使われる。用例：「to|qu|ra|u|ni 脱 | 中［窟 + 鳥］| 舌刺 | 兀-| 泥／傍訳：［茲 + 鳥］［老 + 鳥］-行」、「qu|la|du 中［窟 + 鳥］| 刺 | 都／傍訳：鳥名」。「窟」という音符に「鳥」という意符を付けたのは、モンゴル語の単語にある「鳥」という意味を音訳にも持たせたかったからであると考えられる。

④「kün[15] →中坤（k^hun)」という表記は 1 回だけ現れる。用例：「ö|k|te|kün 斡 | 克 | 帖 | 中坤／傍訳：可與的每」(9；30/8-31/3)。kün の表記には、小書きの「中」が付かない「坤（k^hun)」(134 回）を用いるのが一般的であり、よって、この一箇所のみに現れる「kün →中坤（k^hun)」に関しては、小書きの「中」を誤って付けた可能性が大きい。

⑤「qan →中干(kan)」は、巻 9 において 1 回だけ出現する。用例：「min|qan 敏 | 中干／傍訳：千」(9；33/2-34/2)。minqan は延べ 3 回現れるが、1 回だけ「中干」が用いられ、残りの 2 回は「min|qan 敏 | 干／傍訳：千」（巻 6）というように、小書きの「中」が付かない「干」が用いられている。

⑥「qun →中鶤（kun)」は、「白鳥」を意味する qun という語の表記に用いられる。用例：「qun 中鶤／傍訳：天鵝」(3；18/2-19/6)。表記された語の意味に合わせるために、意符が「鳥」である漢字を選択したと考えられる。

⑦「qun →中崑（kun)」は、「崖」を意味する qun という語の表記に使われる。用例：「qun-|nu 中崑-| 訥／傍訳：崖-的」。qun の「崖」といった意味に合わせるために、「山」という

13　なお、maqalai という語は全 9 回現れるが、1 回だけは「中帢」が用いられており、それ以外の 8 回は「中合」が用いられている。

14　用例の後ろの括弧の数字は、『元朝秘史』の「巻；丁／行」を示す数字である。例えば、「3；23/8-24/3」は、「第 3 巻第 23 丁第 8 行から第 24 丁第 3 行まで」を表す。

15　母音 ü は前舌・円唇母音であり、後舌・円唇母音の u に対立する。

意符をもつ「崑」を用いたと考えられる。

⑧「qun →中昆（kun）」は、巻１において１回現れるが、上の⑦にみた「qun →中崑（kun）」と同じく、qun「崖」という語の表記に用いられている。用例：「qun-|tu|r 昆-| 途 | 児／傍訳：崖-行」（1；16/7-16/10）。qun「崖」は延べ７回現れ、そのうち、６回には「中崑」が用いられ、１回だけ「中昆」が用いられる。

⑨「qang →中康（k^haŋ）」の用例：「qang|qan 中康 | 中罕／傍訳：教足了」。なお、qang という音は、モンゴル語において少なく現れる音である。

⑩「qon →中管（kuan）」という表記は、巻３において１回だけ現れる。用例：「qon|ji|ya|sun 中管 | 只 | 牙 | 孫／傍訳：白腸」（3；45/5-46/1）。ここに使われる「中管」という音訳漢字の「管」は「くだ」の意味を指す。白腸の「腸」も「くだ」のようなので、その意味に合わせるために「管」という漢字を用いた可能性が大きい。なお、『元朝秘史』において、qon という音は延べ３回しか現れず、「qon →中管（kuan）」以外の２例は、小書きの「中」を伴わない「qon →洹（xuan）」、「qon →歡（xuan）」といった表記になっている。

上の分析から分かるように、モンゴル語の声母 q の表記において、声母が k^h 又は k である漢字が用いられた理由に関しては、多くの場合、モンゴル語の意味に合わせるなど、特定に使用された漢字であることが分かる。もし、この表記を音対応の面で公式化すると、次の通りとなる。

Cm/q/ →（中）（Cc/k^h/, /k/）

この公式において、Cm はモンゴル語の声母を表し、Cc は漢語の声母を表す。

３）例外

但し、以上に考察してきた、「モンゴル語声母 q →（中）（漢語声母 x）」と、「モンゴル語声母 q →（中）（漢語声母 k^h, k）」という表記方式は、次のような例外が見受けられる。

①「モンゴル語声母 x, k →（中）（漢語声母 x）」に関して

モンゴル語の声母が q ではなく、x 又は k であるのに、漢語の声母 x に発音記号「中」を付けて対応することである。

小書きの「中」付き x 声母漢字が、頭子音が x 又は k である音の表記に全 84 回用いられ、それは、全「中」付き漢字の全出現回数（6660 回）のわずか 1.26％である。

次には、「モンゴル語声母 x, k →（中）（漢語声母 x）」といった表記を、一般規則として現れる「モンゴル語声母 q →（中）（漢語声母 x）」と比較してみる（次の表４参照）。

以下では、まず、「モンゴル語声母 x, k →（中）（漢語声母 x）」という表記の用例を分析してみる。

表３．「モンゴル語声母 x, k → (中)(漢語声母 x)」の出現状況

種類別	出現回数	出現比率
モンゴル語声母 x → (中)(漢語声母 x)	33	全声母 x の表記の 3.50%を占める
モンゴル語声母 k → (中)(漢語声母 x)	51	全声母 k の表記の 1.06%を占める

表４．「モンゴル語声母 q, x, k → (中)(漢語声母 x)」の内訳

漢字	モンゴル語音	回数	モンゴル語音	回数	モンゴル語音	回数
中合(xo)	qa	3180	ha	18		
中豁(xuo)	qo	915	ho	5		
中忽(xu)	qu	1269	hu	5	hü	5
中灰(xui)	qui	109	küi	51		

a)「モンゴル語声母 x → (中)(漢語声母 x)」について

用例１：「hu →中忽」に関して

「hu →中忽」という表記が、モンゴル語の huya-「縛り付ける」という語の音訳において現れる（次の表５参照）。

但し、huya-「縛り付ける」という語幹の初頭音 hu の表記には、「中忽」ではなく、「忽」が用いられるのが一般的である（次の表６参照）。

用例２：「hü →中忽」に関して

「hü →忽」の用例は次の表７の通りである。

しかし、hülde-「駆ける」の一般的表記は、次の表８の通りとなる。

次の表７と表８の対照から分かるように、hülde-「追い駆ける」といった語幹が、全 28 回現れ、そのうち 24 回は「忽勒迭-」という形で現れ、残りの４回だけが「中忽勒迭」又は「中忽勒荅」という形で現れている。

一方、モンゴル語の h で始まる音のデフォルト表記は、次の通りとなる。

「ha →哈（xa)」(回数：123)

「ho →豁（xuo)」(回数：61)

「hu/hü →忽（xu)」(回数：74/62)

なお、漢字の原音で直接表すことができる h- の表記に、「中」付き漢字を使ったのは、表記上のゆれであるか、それとも書き誤りであるかについて検討の余地がある。

b)「モンゴル語声母 k → (中)(漢語声母 x)」について

次には、「モンゴル語声母 k → (中)(漢語声母 x)」という表記として、一番多く現れる

表５．huya-「縛りつける」における「hu →中忽」

転写	音訳	傍訳	回数
hu|ya|ǰu	中忽|牙|周	拴着	2

表６．huya-「縛りつける」の一般的表記

転写	音訳	傍訳	回数
hu|ya	忽|牙	拴	1
hu|ya|ju	忽|牙|周	拴着	5
hu|ya|q|sa|di	忽|牙|黒|撒|的	拴着的行	1
hu|ya|q|sa|t	忽|牙|黒|撒|惕	拴了的	1

表７．hülde-「駆ける」における「hü →中忽」

転写	音訳	傍訳	回数
hü|l|de|e|t	中忽|勒|答|額|惕	趕了	1
hü|l|de|be	中忽|勒|迭|罷	趕了	1
hü|l|de|jü	中忽|勒|迭|周	趕着	2

表８．hülde-「駆ける」の一般的表記

転写	音訳	傍訳	回数
hü|l|de|e|t	忽|勒|迭|額|惕	追着，趕了，直趕	5
hü|l|de|jü	忽|勒|迭|周	趕着，追着，逐着	17
hü|l|de|k|de|jü	忽|勒|迭|克|迭|周	被追着	1
hü|l|de|l|dü|jü	忽|勒|迭|勒|都|周	相逐着	1

「küi →中灰」の使用状況についてみる。

音訳漢字「中灰」はモンゴル語の頭子音 q- の表記に使われるが、k で始まる音の表記に用いられるケースもある。

「qui →中灰」の例：

a. 不 | 中灰 bü-|qui ／有時（5；43/4-44/1）

b. 升 | 格 | 中灰 šing-|ge-|qui ／消化的（8；16/9-17/3）

c. 亦 | 咥 | 中灰 i-|de-|qui ／喫的（12；12/3-12/8）

d. 格 | 赤 | 乞 | 列 | 中灰 ge-|či-|ki-|le-|qui ／踐踏（12；29/8-30/5）

e. 脱 | 舌列 | 中灰 | 突 | 舌児 tö-|re-|qui-|dü|r ／生的時（9；5/6-6/6）

f. 客 | 額 | 勒 | 都 | 中灰 | 突 | 児 ke-|el-|dü-|qui-|tür ／共説時（2；19/4-19/8）

「中灰」は、一般に形容名詞接尾辞 -qui の表記に用いられる。この形容名詞接尾辞 –qui は男性語に接続する接尾辞である。但し、「頭子音 qui →中灰」の用例の場合、単語の母音がすべて女性母音であるのに、男性母音と共起する「中灰」（qui）が使用されている。

モンゴル語の規則としては、一つの単語において、母音はすべて男性母音、あるいはすべて女性母音でなければならない。女性母音の単語であるならば、男性母音と共起するはずの「中灰」（qui）ではなくて、女性母音と共起する「恢」（küi）が用いられるはずである。しかし、この女性母音と共起するはずの「恢」（küi）に関しても、男性母音の単語と共起する例外が見られる。

「qui →恢」の例：

a. 中忽 | 赤 | 兀 | 勒 | 恢 qu-|či-|ul-|küi ／繞了（3；17/9–18/2）

b. 中合 | 舌児 | 恢 qa-|r-|küi ／出的（6；21/6–21/10）

c. 勺 | 乞 | 恢 ǰo-|ki-|küi ／宜的（7；9/9–10/2）

d. 牙 | 荅 | 恢 ya-|da-|küi ／不能的（7；28/10–30/1）

e. 中合 | 中合 | 察 | 恢 qa-|qa-|ča-|küi ／離的（7；26/4–26/8）

このように、母音調和という点から見て、男性語に配置される「中灰」と、女性語に配置される「恢」が例外的に現れるのは、恐らく、「中灰」と「恢」の「中」と「忄」の表記が類似しているため、後人が写す[16]際に、混同したためであろうと考えられる。

②「モンゴル語声母 q →（中）が付かない漢語声母 x」に関して

モンゴル語の声母 q の表記に、小書きの「中」が付かない漢語声母 x をもって直接に対応するというケースも存在する（次の表９参照）。

表９．「モンゴル語声母 q →漢語声母 x」の内訳

	モ音→漢音	声母	韻母	漢字		モ音→漢音	声母	韻母	漢字
1	qa→xua	q→x	a→ua	花	7	qɔ→xuan	q→x	ɔ→uan	洹, 歡
2	qa→xo	q→x	a→o	合	8	qɔŋ→xuaŋ	q→x	ɔŋ→uaŋ	晃
3	qa→xa	q→x	a→a	哈	9	qo→xu	q→x	u→u	忽
4	qai→xai	q→x	ai→ai	孩	10	qui→xuei	q→x	ui→uei	灰
5	qam→xam	q→x	am→am	含	11	qun→xun	q→x	un→un	渾
6	qan→xan	q→x	an→an	罕					

16 『元朝秘史』の漢字音訳本は明朝時代に音訳されたものであるが、原本は未だに発見されていない。現在に伝わっている版本は清朝時代に写したものである。

モンゴル語の声母 q の表記に「中」が付かない漢字声母 x を用いるのは全 347 回現れ、全ての声母 q（6919 回）の表記の 5.02％を占める。もし、モンゴル語の声母 q の表記に一般に従う「Cm/q/ → （中）(Cc/x/)」という表記規則からすれば、「中」が付かない漢字の声母 x で、モンゴル語の声母 q に直接に対応するのは例外であると見なさざるを得ない。その理由として、音写時或いは書写時に「中」を付け忘れたか、或いはすでに付いている「中」を見落として書写したか、などが考えられる。

③「モンゴル語ゼロ声母→ （中）(漢語声母 w)」に関して

『元朝秘史』の音訳において、モンゴル語の音節初頭音となる母音 u は漢語の u によって対応されるが、音訳において、その声母 w には小書きの「中」を付けるケースが見られる（次の表 10 参照）。

なお、前に挙げた音訳漢字「中兀」と「中翁」の用例は次の表 11 の通りである。

上に見た母音 u で始まる音に対応する「中」付き w 声母漢字に関しても、上に示した「Cm/q/ → （中）(Cc/x/)」といった規則から外れるものとなる。

（2）モンゴル語声母 r への対応

『元朝秘史』において、モンゴル語の声母 r の表記には、漢語の声母 l に小書きの「舌」を付けて対応するのである。

コーパスに基づく集計によれば、『元朝秘史』の全巻に亘って、小書きの「舌」付き漢字が延べで 5194 回用いられ、そのうち、5131 回がモンゴル語の声母 r で始まる音節に対応し、それが全「舌」付き漢字の 98.79％を占める。残りの 63 回は声母 l に用いられ、わずか 1.21% を占めるのみである。

表 10.「モンゴル語声母 0 → （中）(漢語声母 w)」の内訳

モ音→漢音	声母	韻母	漢字	回数
ü→wu	0→w	üŋ→uŋ	中兀	2
üŋ→wuŋ	0→w	üŋ→uŋ	中翁	2

表 11.「中兀」と「中翁」の用例

	転写	音訳	傍訳	出所
1	a|u|jam_|bo|ro|u|lun	阿|兀|站_|孛|中羅|中兀-|侖	（傍訳なし）-的	1;1/9-2/2
2	a|u|la	阿|中兀|剌	山	7;34/3-34/9
3	ung|gi|ran	中翁|吉|中闌	人名	8;25/1-27/1
4	ung|ši|q|da|ju	中翁|失|黑|荅|周	被叫着	2;13/7-14/2

まず、「モンゴル語声母 r →(舌)(漢語声母 l)」の内訳をまとめると、次の表12の通りである。

次の表 12 が示すように、モンゴル語の声母 r の表記に用いられる漢字音の声母は一律に l となっている。つまり、声母が l である漢字に小書きの「舌」を付けて表すのは、モンゴル語声母 r の表記のデフォルトである。この表記を公式で示すと、次の通りとなる。

Cm/r/ → (舌)(Cc/l/)

この公式において、Cm はモンゴル語の声母を表し、Cc は漢語の声母を表す。

一方、上述の表記規則には、次のような例外が見受けられる。

表 12.「モンゴル語声母 r → (舌)(漢語声母 l)」の内訳

	モ音→漢音	声母対応	韻母対応	漢字
1	ra→(舌)la	r→(舌)l	a→a	舌刺, 舌[目刺], 舌[刺齒]
2	rai→(舌)lai	r→(舌)l	ai→ai	舌来
3	ram→(舌)lam	r→(舌)l	am→am	舌藍, 舌籃
4	ran→(舌)lan	r→(舌)l	an→an	舌闌
5	raŋ→(舌)laŋ	r→(舌)l	aŋ→aŋ	舌郎
6	re→(舌)lie	r→(舌)l	e→ie	舌列, 舌洌
7	re→(舌)liue	r→(舌)l	e→iue	舌劣
8	rei→(舌)lai	r→(舌)l	ei→ai	舌来
9	rem→(舌)liam	r→(舌)l	em→iam	舌廉
10	ren→(舌)lian	r→(舌)l	en→ian	舌漣, 舌連, 舌怜
11	reŋ→(舌)liaŋ	r→(舌)l	eŋ→iaŋ	舌良
12	ri→(舌)li	r→(舌)l	i→i	舌里, 舌理, 舌驪, 舌離, 舌[羊歷], 舌澧
13	riaŋ→(舌)liaŋ	r→(舌)l	iaŋ→iaŋ	舌良
14	rim→(舌)lim	r→(舌)l	im→im	舌林
15	rin→(舌)lin	r→(舌)l	in→in	舌鄰, 舌驎
16	riŋ→(舌)liŋ	r→(舌)l	iŋ→iŋ	舌零
17	ro→(舌)luo	r→(舌)l	o→uo	舌羅, 舌騾, 舌[馬羅]
18	rö→(舌)liue	r→(舌)l	ö→iue	舌劣
19	ron→(舌)luan	r→(舌)l	on→uan	舌欒
20	ru/rü→(舌)lu	r→(舌)l	u/ü→u	舌魯, 舌路, 舌[目盧]
21	rui→(舌)lui	r→(舌)l	ui→ui	舌雷
22	run/rün→(舌)lun	r→(舌)l	un/ün→un	舌侖, 舌論, 舌輪
23	rüŋ→(舌)luŋ	r→(舌)l	üŋ→uŋ	舌籠, 舌瀧

表 13.「モンゴル語声母 l →（舌）(漢語声母 l)」の内訳

	モ音→漢音	声母対応	韻母対応	漢字	回数
1	la→(舌)la	l→(舌)l	a→a	舌剌	6
2	le→(舌)lie	l→(舌)l	e→ie	舌列	26
3	li→(舌)li	l→(舌)l	i→i	舌里	6
4	lin→(舌)lin	l→(舌)l	in→in	舌鄰	1
5	liŋ→(舌)liŋ	l→(舌)l	iŋ→iŋ	舌零	4
6	lo/lö→(舌)luo	l→(舌)l	o/ö→uo	舌羅	1
7	lö→(舌)luo	l→(舌)l	ö→uo	舌捋	1
8	lu/lü→(舌)lu	l→(舌)l	u/ü→u	舌魯	6
9	lun/lün→(舌)lun	l→(舌)l	un/ün→un	舌侖	6

①「モンゴル語声母 l →（舌）(漢語声母 l)」に関して

モンゴル語の声母が r ではなく、l であるのに、小書きの「舌」付き漢語声母 l で対応するケースがある（上の表 13 参照）。

既に示したように、モンゴル語音節頭子音 r の表記のデフォルトは、「Cm/r/ →（舌）(Cc/l/)」であり、漢字音に存在しないモンゴル語のふるえ音 r を精確に表すため、発音記号「舌」を用いる特殊表記が使われている。一方、モンゴル語の音節頭子音 l は、漢字音の声母 l によって対応されるのが一般的である。上の表13に示したような、「モンゴル語声母l→(舌)(漢語声母 l)」という表記は、対音の種類からしても、出現比率からしても、異例なものとなる。その発生した原因について、いったい、音訳者がモンゴル語のl音を r 音として誤って聞き取ったためか、或いは単なる写し間違いであるかを検証する必要があるが、これは今後の課題としたい。

②「モンゴル語声母 r →漢語声母 l」に関して

一方、モンゴル語の声母 r の表記に、漢語声母 l に小書きの「舌」を付けずに用いたケースが見受けられる（次の表 14 参照）。

次の表 14 の対応例においては、漢語の声母が一律に l となっている。音訳において、漢語の声母 l はモンゴル語の声母 l と一致対応を構成し、漢語声母 l に小書きの「舌」を付けてモンゴル語の声母 r に対応するのである。よって、モンゴル語の声母 r を表すのに、漢語の声母 l に小書きの「舌」を付けずに対応するのは、モンゴル語の r 音を l 音に間違って聞き取ったためか、或いは小書きの「舌」を書き忘れたためかについては今後検討する必要がある。

表 14.「モンゴル語声母 r →漢語声母 l」の集計

	モ音→漢音	声母対応	韻母対応	漢字	回数
1	ra→la	r→l	a→a	剌	37
2	ra→la	r→l	a→a	[目+剌]	2
3	rai→lai	r→l	ai→ai	来	1
4	ram→lam	r→l	am→am	藍	1
5	ran→lan	r→l	an→an	闌	3
6	re→lie	r→l	e→ie	列	37
7	re→lie	r→l	e→ie	洌	2
8	ren→lian	r→l	en→ian	連	2
9	ren→lian	r→l	en→ian	漣	5
10	ri→li	r→l	i→i	驪	24
11	ri→li	r→l	i→i	里	20
12	ri→li	r→l	i→i	理	4
13	rim→lim	r→l	im→im	林	3
14	rin→lin	r→l	in→in	驎	1
15	rin→lin	r→l	in→in	鄰	5
16	ro→luo	r→l	o→uo	羅	9
17	rö→liue	r→l	ö→iue	劣	3
18	ru/rü→lu	r→l	u/ü→u	魯	3211
19	run/rün→lun	r→l	un/ün→un	侖	63
20	rün→lun	r→l	ün→un	論	12
21	rüŋ→luŋ	r→l	üŋ→uŋ	籠	2

3．モンゴル語音節末子音への対応

『元朝秘史』のモンゴル語において、n, b, q, k, m, l, s, ʃ, t, tʃ, r, ŋ の 12 種類の音節末子音が現れる [17]。これらの音節末子音の調音は次の表 15 の通りである。

漢字音訳において、上記の音節末子音が、基本的に「漢語韻尾による対応」と「漢語声母による対応」といった二種類の方式で表記されるのである。

17　服部四郎（1946）では、『元朝秘史』における漢語からの借用語「太子」の「子」といった漢字の音を dz と推定している。服部氏の推定に従えば、モンゴル語の音節構造からして、この /dz/ が音節末子音に当たる。但し、Ligeti（1971）では、「子」を si と転写している。確かに、漢語の「太子」に由来する語を 13 世紀又はそれに近い時代のウイグル式モンゴル文字文献では TAISI と書くので、taisi と転写する理由がある。そこで、本稿では「太子」の「子」を音節末子音の表記漢字として扱わない。

表 15. モンゴル語音節末子音

	両唇	歯茎	後部歯茎	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂
破裂音	b	t		tʃ	k	q
鼻音	m	n			ŋ	
ふるえ音		r				
摩擦音		s	ʃ			
側面接近音		l				

表 16.「モンゴル語音節末子音 n, m, ŋ →漢字韻尾 n, m, ŋ」の用例

	ローマ字転写	漢字音訳	傍訳	出所
1	qo-|rin	中豁|舌鄰	二十	6;24/4-25/4
2	ǰa-|rim	札|舌林	一半	12;39/10-40/7
3	ǰi|r-|qa-|lang	只|兒|中合|郎	快活	1;39/1-39/6

『元朝秘史』のモンゴル語の n, b, q, k, m, l, s, ʃ, t, tʃ, r, ŋ という 12 種類の音節末子音のうち、n, m, ŋ という 3 つの種類は、それぞれ漢語の韻尾 n, m, ŋ によって対応されているのである（上の表 16 の用例を参照）。

つまり、モンゴル語の韻尾（音節末子音）が n, m, ŋ であるとき、漢字一字の音構造の枠内で、漢字音の韻尾によって直接に対応される。且つ、モンゴル語韻尾と漢語韻尾の間で、完全な一致対応を形成する。こうした対応を漢字によるモンゴル語音節末子音の通常表記方式とみることができる。

しかし、問題は、音訳当時のモンゴル語音節末子音は 12 種類もあるのに対して、漢語の韻尾は n, m, ŋ という三種類しかない。そこで、漢字音の韻尾で表しきれないモンゴル語音節末子音をどのように表すかという問題が生じる。この問題に対して、音訳者は、漢字の韻尾で直接に対応できないモンゴル語の音節末子音を、漢字一字をもって対応するという特殊なやり方を採ったのである。一方、音節末子音のこのような表記方法を音対応の観点からすれば、漢字音の声母がモンゴル語の音節末子音に音声的にマッチしているとみることができるのである。モンゴル語音節末子音の表記に用いられたこの方式を、本稿では、特殊表記方式の一種として見なすことにする。

（1）漢語声母による対応

『元朝秘史』の音訳において、モンゴル語の音節末子音の表記によく用いられる手法は、漢字一字をもって表す手法である。現れる全 12 種類の音節末子音のうち、ŋ を除いて、n, b, q, k, m, l, s, ʃ, t, tʃ, r の 11 種類の音節末子音の表記に、漢字一字による表記方法が用いられる。そのうち、末子音 n, m は漢字音の韻尾で直接に対応される以外に、漢字一字で表記される

ケースもある。それ以外の b, q, k, l, s, ʃ, t, tʃ, r は、基本的に漢字一字によって表記されている。

とはいえ、漢字一字が当てられるとしても、音声的に見れば、該当する末子音に対応するのが、漢字の声母となるので、こうした対応方式を「漢語声母によるモンゴル語音節末子音への対応」と見ることができる。漢字一字による末子音への対応について、例を示せば次の表 17 の通りである。

ここに言う漢語の声母で対応する方法とは、声母がモンゴル語の韻尾（音節末子音）に一致する又は近似する漢字を用いる方法である。用いられる漢字を普通のサイズで書く場合（次の表 17 の 1 を参照）と、小さく書く場合（次の表 17 の 2、3 を参照）といった二通りがある。

この表記方法は、モンゴル語の音節を分解して対応する方法であり、dü|r に「都 | 児」、ǰa|r に「札 |舌児」、li|q に「里 |黒」、ke|b に「客 |卜」、ü|l に「兀 |勒」のように、モンゴル語の一つの音節に二つの漢字が関わるのである。こうした対応関係を CVC 音節構造に沿って示せば、次の表 18 の通りとなる。

つまり、モンゴル語の音節が漢字一字の音節構造で対応できない場合、その音節を分解して、前の漢字がモンゴル語音節の前の部分（C)V に対応し、後ろの漢字が音節末の子音 C に対応するのである。なお、末子音の対応に関しては、主に漢字の声母が選択されている。

一方、漢字音の要素には、声母以外に、また韻母と声調がある。そこで、モンゴル語の末子音に対応する漢字音の諸要素がどのような動きをしているかについてみる必要がある。『元朝秘史』の音訳におけるモンゴル語の音節末子音と、それに対応する漢字音を「声母・韻母／声調」に沿って示せば次の表 19 の通りである。

以下では、漢字によるモンゴル語音節末子音への対応の規則を示すことにする。

表 17.「モンゴル語末子音→漢字一字」の用例

	ローマ字転写	漢字音訳	傍訳	出所
1	ü-|dü|r	兀|都|児	日	1;3/7-3/10
2	ǰa|r-|li|q	札|舌児|里|黒	聖旨	4;43/1-43/10
3	ke|b-|te-|ü|l	客|卜|帖|兀|勒	宿衛	9;47/7-48/2

表 18. 漢語とモンゴル語の音節対応関係と音節末子音表記

漢字 ＼ モンゴル語	漢字[1]				漢字[2]			
	声母	韻母			声母	韻母		
		介音	主母音	韻尾		介音	主母音	韻尾
	(C)	(V)	V	(C)	C	(V)	V	(C)
VC			V		C		V	
CVC	C		V		C		V	

表 19. モンゴル語音節末子音と、それに対応する漢字音

	モンゴル語音節末子音	音訳漢字（大字・小字別）	漢字音	声母・韻母／声調			
				声母	主母音	韻尾	声調[18]
1	n	你	ni	n	i		上声
2	b	卜	pu	p	u		入声
3	q	黑	xei	x	e	i	入声
4	k	克	kʰei	kʰ	e	i	入声
5	m	木	mu	m	u		入声
6	l	勒	lei	l	e	i	入声
		泐	lei	l	e	i	入声
		汢	lei	l	e	i	入声
7	s	思, 思	sï	s	ï		平声
8	ʃ(š)	失	ṣï	ṣ	ï		入声
		室	ṣï	ṣ	ï		入声
9	t	惕	tʰi	tʰ	i		入声
10	tʃ(č)	赤	tṣʰï	tṣʰ	ï		入声
11	r	舌児, 児	ɹï	ɹ	ï		平声
		舌峏, 峏	ɹï	ɹ	ï		平声
		舌洏, 洏	ɹï	ɹ	ï		平声

1）モンゴル語の音節末子音 n に対応する「你」、音節末子音 m に対応する「木」、音節末子音 l に対応する「勒 , 泐 , 汢」、音節末子音 s に対応する「思 , 思」に関しては、漢字音の声母がいずれも対応されるモンゴル語の音節末子音に一致するのである。つまり、前述の対応を各々に示せば、「モンゴル語末子音 n →漢語声母 n」「モンゴル語末子音 m →漢語声母 m」「モンゴル語末子音 l →漢語声母 l」「モンゴル語末子音 s →声母漢語 s」という対応を構成するのであり、これらの対応を次の公式で示すことができる。

Em ≡ Cc

この公式において、Em はモンゴル語の音節末子音を表し、Cc は漢語の声母を表す。「≡」は一致対応を示す。

2）モンゴル語の音節末子音 b, k, t, tʃ, ʃ は、「卜 , 克 , 惕 , 赤 , 失 , 室」といった小書きの漢字で対応される。且つ、これらの漢字の主母音は狭母音で、声調が入声である。これらの対応をまとめると、次の通りである。

①モンゴル語末子音 b →漢語 p[u]（小字・入声）

18　音訳漢字の声調は、服部四郎（1946:139-144）「音訳漢字順位表」に示される声調データに基づく。

②モンゴル語末子音 k →漢語 k^h[ei]（小字・入声）

③モンゴル語末子音 t →漢語 t^h[i]（小字・入声）

④モンゴル語末子音 tʃ →漢語 $tʂ^h$[ï]（小字・入声）

⑤モンゴル語末子音 ʃ →漢語 ʂ[ï]（小字・入声）

つまり、モンゴル語の有声子音が漢語の無気子音で対応され、モンゴル語の無声子音が漢語の有気子音で対応される。この対応を次のように公式化することができよう。

Em ± vo → Cc ± as

この公式において、Em はモンゴル語の音節末子音を表し、Cc は漢語の声母を表す。+vo は voiced（有声）を、-vo は voiceless（無声）を、+as は aspirated（有気）を、-as は unaspirated（無気）を表す。矢印「→」はモンゴル語音と漢語音の近似対応を表す。

３）音節末子音 r を表す「児」と「舌児」に関しては、先行研究において、「児」は第１巻と第２巻に集中し、「舌児」は、第３巻から第 12 巻において集中することが指摘されている[19]。筆者による「児」と「舌児」の分布データは、次の表 20 の通りである。

『元朝秘史』において、第１、２巻と、それ以降の巻は、音訳用字の点で異なる点が認められる[20]。モンゴル語の音節末子音の表記に用いられた音訳漢字「児」と「舌児」の分布も、第１、２巻と、それ以降の巻において異なるのである。

一方、末子音 r を表す「舌児」の場合、発音記号「舌」を付けている。このやり方については、音訳当時の漢語の ɹ 音が、モンゴル語のふるえ音 r と音声的に異なるので、漢語声母 ɹ に「舌」を付けて、ふるえ音 r のように発音する、ということを示すためであると説明できる。そこで、音節末子音 r と「舌児（児）」の対応の規則を、次の公式で示すことができよう。

Em/r/ → （舌）(Cc/ɹ/)

上の公式において、Em はモンゴル語の韻尾（末子音）を表し、Cc は漢語の声母を表す。

（２）モンゴル語音節末子音 l の例外表記

モンゴル語の音節末子音 l の表記のデフォルトは、声母が l である漢字を小書きにして表すことであり、用いる漢字は「勒」「泐」「氻」の３つのみである。そのうち、「勒」が圧

表 20. 音節末子音 r の表記に用いられる「児」と「舌児」の分布状況

モ音	漢字	全回数	巻 1	巻 2	巻 3	巻 4	巻 5	巻 6	巻 7	巻 8	巻 9	巻 10	巻 11	巻 12
r	児	1102	363	471	11	29	16	15	11	10	95	29	44	8
	舌児	3733	0	7	397	306	376	397	308	417	294	344	389	498

19　栗林均 2003 の「前書き」を参照。

20　小澤重男（1994:220）では、第１、第２巻とそれ以降の巻は、成立された時期が異なるとされる。

倒的に多く用いられ、「勐」「氻」は稀に使われるのみである（次の表 21 参照）。

但し、音節末子音 l の表記には、下の表の方法以外にも 2 種類の方法が存在する。一つは、漢字の韻尾 n で表記する方法であり、もう一つは、漢字の韻尾 n と漢字（小書き）の声母 l の結合で表す方法である。

1）音節末子音 l への漢字韻尾 n による対応

『元朝秘史』における「モンゴル語音節末子音 l →漢字韻尾 n」という表記方式の用例は次の表 22 の通りである。

表 21. モンゴル語音節末子音 l →声母が l である漢字

表記音	漢字	回数	比率（%）
l	勒	2700	99.56
	勐	11	0.41
	氻	1	0.03
合計		2712	100

表 22. 「モンゴル語音節末子音 l →漢字韻尾 n」の用例

ローマ字転写	漢字音訳	傍訳	出所
qa|r-|bu-|lal-|du-|su	合|児|不|闌|都|速	厮射	2;32/3-32/5
neng-|ǰi-|lel-|dü-|be	能|知|連|都|罷	相搜尋了	2;24/5-24/6
či-|ul-|ǰu	赤|温|周	聚着	2;20/3-20/8

表 23. 「モンゴル語末子音 l →漢字韻尾 n」の内訳

転写	漢字	モ音→漢音	回数
čöl[21]	川	ʧöl→tʂʰuan	1
lal	闌	lal→lan	1
ral		ral→lan	2
lel	連	lel→lian	2
ol	完	ol→wuan	1
ral	舌闌	ral→(舌)+lan	1
ril	舌鄰	ril→(舌)+lin	6
tül	屯	tül→tʰun	1
ul	温	ul→wun	10
ül		ül→wun	5

21　母音 ö は前舌・円唇母音であり、後舌・円唇母音の o に対立する。

表 24.「モンゴル語末子音 l →漢字韻尾 n」の巻毎の分布状況

モ音	漢字	合計	巻 1	巻 2	巻 3	巻 4	巻 5	巻 6	巻 7	巻 8	巻 9	巻 10	巻 11	巻 12
čöl	川	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
lal	闌	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
lel	連	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
öl	完	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ral	闌	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ral	(舌)闌	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ril	(舌)鄰	6	0	3	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0
tül	屯	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ul	温	10	3	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ül	温	5	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合　計		30	8	17	1	1	1	1						1

表 25.「モンゴル語末子音 l →漢字韻尾 n」の全用例

モ音	漢字	モ転写	音訳	傍訳	回数
čöl	川	čöl|lün	川|侖	地名的	1
lal	闌	qa|r|bu|lal|du|su	合|児|不|闌|都|速	厮射	1
ral	闌	qa|ral|dai	中合|闌|歹	名	1
ran	闌	na|ran	納|闌	日	2
lel	連	neng[ǰi|lel|dü|ye	能|知|連|都|牙	相搜尋咱	1
ol	完	ol[ǰa|u	完|札|兀	外財	1
ral	舌闌	ma|ral|lun	馬|(舌)闌|侖	母鹿的	1
ril	舌鄰	ta|r|qu|tai_|ki|ril|tu|q	塔|児|中忽|台_|乞|舌鄰|禿|黒	人名	1
ril	舌鄰	ki|ril|tu|q	乞|舌鄰|禿|黒	人名	2
ril	舌鄰	to|o|ril	脫|斡|舌鄰	人名	1
ril	舌鄰	ta|r|qu|tai_|ki|ril|tu|gi	塔|舌|児|中忽|台_|乞|舌鄰|禿|吉	人名	1
ril	舌鄰	to|o|ril|la	脫|斡|舌鄰|剌	人名行	1
tül	屯	e|ye|tül|dü[ǰü	額耶|屯|都|周	商量着	1
ül	温	bi|tü|ül[ǰü	必|禿|温|周	教循着，輪着	2
ul	温	ha|ul[ǰu	哈|温|周	走馬着	1
ul	温	bai|yi|ul|qun	伯|亦|温|中渾	教停住	1
ül	温	neng[ǰi|ül|sün	能|知|温|孫	搜的每	1
ul	温	ta|l|bi|ul[ǰu	塔$_{\text{剌}}$|必|温|周	教放着	1
ul	温	qo|no|ul|qui|du|r	豁|那|温|恢|突|児	宿的時分	1
ul	温	so|či|ul	鎖|赤|温	驚	1
ul	温	či|ul[ǰu	赤|温|周	聚着	1
ul	温	u|nu|ul[ǰu	兀|訥|温|周	教坐着	2
ul	温	sa|ul[ǰu	撒|温|周	坐着	1
ul	温	mo|ri|la|ul[ǰu	秣|驪|剌|温|周	叫上馬着	1
ül	温	i|re|ül[ǰü	亦|舌|列|温|周	教来着	1
ül	温	kü|ne|sü|le|ül|be	古|捏|速|列|温|罷	行粮教做了	1
合　計					30

「モンゴル語 l →（末子音）漢字 n（韻尾）」という表記方式に関して、『元朝秘史』では、８種類の漢字で 10 種類のモンゴル語音が表記されている（前の表 23 参照）。

『元朝秘史』の全 12 巻において、「モンゴル語韻尾 l →漢字韻尾 n」という表記の巻毎における分布状況は次の通りである（前の表 24 参照）。

前の表 24 のデータが示すように、「モンゴル語末子音 l →漢字韻尾 n」といった表記が、明らかに巻１と巻２に集中することは、注目に値する。

前の表 25 は『元朝秘史』に現れる「モンゴル語末子音 l →漢字韻尾 n」の全用例を示したものである。

漢字の韻尾 n でモンゴル語の音節末子音 l を表すやり方は、『元朝秘史』以前の漢字音訳の資料にも見られる。例えば、元代に成立した漢語･モンゴル語対訳語彙集『至元訳語』には、漢字韻尾 n でモンゴル語音節末子音 l を表している[22]。また、モンゴル語以外の複数

表 26.「モンゴル語音節末子音 l →複合漢字」の用例

ローマ字転写	漢字音訳	傍訳	出所
ši-|ča-|bal-|ǰa-|ǰu	拭|察|班勒|札|周	爬着	1;13/1-13/7
a-|yil	阿|因勒	營	2;21/8-22/4
hau-|ul-|ǰu	好|温勒|周	奔着	1;34/4-34/8

表 27.「末子音が l である音節→複合漢字」の内訳

モ音	漢字	回数	モ音	漢字	回数
bal	班勒	1	ral	闌勒	1
bul	奔勒	5	rel	舌連勒	5
čöl	川勒	3	rel	舌連勒	2
ǰil	真勒	2	ril	舌鄰勒	49
kil	勤勒	4	rul	舌侖勒	1
kül	坤勒	2	rül		3
lal	闌勒	3	šil	申勒	5
lel	連勒	2	söl	旋勒	1
lul	侖勒	4	sal	散勒	1
mul	門勒	1	sul	孫勒	1
mül		1	töl	團勒	2
nil	紉勒	1	tül	屯勒	1
ol	完勒	1	ul	温勒	22
öl		7	ül		11
qul	中渾勒	4	yil	因勒	4
qul	渾勒	1	yil	寅勒	1
ral	舌闌勒	5		合計： 157	

22 『至元訳語』において、モンゴル語の音節末子音 /l/ を、漢字の韻尾 /n/ で表すが、漢字の韻尾 /ŋ/ で表す例も見られる。

表 28.「末子音が l である音節→複合漢字」の巻毎の分布状況

モ音	漢字	合計	巻 1	巻 2	巻 3	巻 4	巻 5	巻 6	巻 7	巻 8	巻 9	巻 10	巻 11	巻 12
bal	班勒	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
bul	奔勒	5	0	3	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
čöl	川勒	3	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1
jil	真勒	2	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0
kil	勤勒	4	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
kül	坤勒	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
lal	闌勒	3	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
lal	闌勒	3	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
lel	連勒	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
lul	侖勒	4	0	0	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0
mul	門勒	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
mül	門勒	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
nil	紉勒	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
öl	完勒	7	3	0	1	0	0	0	1	2	0	0	0	0
ol	完勒	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
qul	中渾勒	4	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0
qul	渾勒	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
ral	闌勒	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ral	闌勒	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
rel	連勒	2	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
ril	舌鄰勒	49	0	0	20	9	7	2	1	1	0	4	2	3
rül	舌侖勒	3	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0
rul	舌侖勒	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
sal	散勒	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
šil	申勒	5	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	1
söl	旋勒	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
sul	孫勒	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
töl	團勒	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
tül	屯勒	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ul	温勒	22	11	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ül	温勒	11	5	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
yil	因勒	4	0	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0
yil	寅勒	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		151	23	32	38	18	11	2	7	8	1	4	2	5

言語の『華夷訳語』の漢字音訳にもこのようなケースが見られる（更科慎一 2003 参照）。この方式は、漢字による末子音 l 表記の伝統的な音訳方法であったといえる。

2）「複合漢字」による「 l モンゴル語音」への対応

モンゴル語音節末子音 l は、「複合漢字」と筆者が称する組み合わせ漢字で表記されている（前の表 26 参照）。二つの漢字（発音記号である小書きの「中」「舌」は除外）を組み合わせて表記された「班勒」「因勒」「温勒」のような漢字がここで言う「複合漢字」である。モンゴル語の音節末子音 l に対応する「漢字 n（韻尾）+ l 声母漢字（小書き）」の用例は前の表 26 の通りである。

なお、「モンゴル語音節末子音 l →漢字 n（韻尾）+ l 声母漢字（小書き）」という表記方式をまとめれば、前の表 27 の通りである。

更に、『元朝秘史』の巻毎における「末子音が l である音節→複合漢字」という表記の分布状況は、前の表 28 の通りとなる。

なお、前の表 27 から分かるように、複合漢字による表記の出現回数はさほど高くはなく、「ril →舌鄰勒」という表記の出現回数が比較的に高いことが分かる。そこで、以下、この「ril →舌鄰勒」を例として、「モンゴル語末子音 l →漢字［韻尾 n+ 声母 l］」の事例を挙げてみる（次の表 29 参照）。

前の表 28 が示すように、「モンゴル語末子音 l →漢字［韻尾 n + 声母 l］」という対応の

表 29.「モンゴル語末子音 l →漢字［韻尾 n + 声母 l］」の用例

モ転写	音訳	傍訳	回数
a|ril|ǰu	阿|舌鄰勒|周	净着	1
ba|ril|du|ba	把|舌鄰勒|都|罷	相搏了	1
ba|ril|du|ǰu	把|舌鄰勒|都|周	共拿着	1
ba|ril|du|qui|du|r	把|舌鄰勒|都|中灰|突|舌児	相搏時	1
ba|ril|du|u|l|su|qai	巴|舌鄰勒|都|兀|勒|速|中孩	相接我	1
ba|ril|du|u|l|tu|qai	巴|舌鄰勒|都|兀|勒|禿|中孩	教接者	1
gü|sen_|da|ril	古|先_|荅|舌鄰勒	城名	1
qa|l|ta|ril	中合|勒|塔|舌鄰勒	避	1
qu|ril	中忽|舌鄰勒	人名	1
qu|ril|ta	中忽|舌鄰勒|塔	聚會	1
so|ril|du|ya	莎|舌鄰勒|都|牙	共試咱	1
ta|r|qu|tai_|ki|ril|tu|gi	塔|舌児|中忽|台_|乞|舌鄰勒|禿|吉	人名行	2
ta|r|qu|tai_|ki|ril|tu|q	塔|舌児|中忽|台_|乞|舌鄰勒|禿|黒	人名	2
ta|r|qu|tai_|ki|ril|tu|qun	塔|舌児|中忽|台_|乞|舌鄰勒|禿|中渾	人名的	1
te|be|ril|dü|bei	帖|別|舌鄰勒|都|罷	相見了	1
te|be|ril|dün	帖|別|舌鄰勒|敦	相抱	1
to|o|ril	脫|斡|舌鄰勒	人名，名	31
合 計			49

表 30. 音節末子音の表記方式と出現回数・比率（%）[24]

音節末子音	全回数	①漢字の韻尾による表記	②漢字一字による表記	③複合漢字による表記
b	545	0	545 (100)	0
q	1169	0	1169 (100)	0
k	844	0	844 (100)	0
t	1902	0	1902 (100)	0
s	839	0	839 (100)	0
ʃ	2	0	2 (100)	0
tʃ	5	0	5 (100)	0
r	4868	0	4868 (100)	0
ŋ	1222	1222 (100)	0	0
n	8906	8874 (99.64)	32 (0.36)	0
m	321	287 (89.41)	34 (10.59)	0
l	2899	30 (1.03)	2712 (93.55)	157 (5.42)
合 計	23522	10413 (44.27)	12952 (55.06)	157 (0.67)

事例は、『元朝秘史』の全 12 巻に亘って分布しているが、特に巻 1 から巻 3 に集中するという傾向が見受けられる。とりわけ音訳漢字「温」と「温勒」は、ほとんど第 1 ～ 2 巻に集中している。

『元朝秘史』の第 1 ～ 2 巻および巻 3 の一部と、それ以降の巻の間で、音訳用字の面で異なる点が認められる [23]。ここで、モンゴル語音節末子音の表記に関わる「温」と「温勒」の出現も、上述の現象と並行していることを指摘しておきたい。

（3）音節末子音の表記のまとめ

上に見たように、『元朝秘史』におけるモンゴル語音節末子音の漢字表記には、①漢字の韻尾による表記、②漢字一字による表記、③複合漢字による表記、といった三つの方式が認められる。一般的には、上述の三つの表記方式のうち、①又は②が用いられるが、音節末子音 l の場合には、三つの方式が用いられる。なお、モンゴル語の音節末子音の表記に用いられた三つの方式の出現回数と比率は、上の表 30 の通りである。

上の表 30 のデータから、次の点が提示できよう。

モンゴル語の 12 種類の音節末子音を表す三つの方式において、出現率が一番高いのは②「漢字一字による表記」（55.06%）であり、その次は①「漢字の韻尾による表記」（44.27%）である。出現率が最も低いのは③「複合漢字による表記」（0.67%）である。一方、表記さ

23　前掲注 20 参照。

24　表 30 における音節末子音の配列順序は、便宜上分布関係の内訳を視覚的に理解しやすくするためのものである。

れる音節末子音の種類から見れば、②「漢字一字による表記」はb, q, k, t, s, ʃ, tʃ, r, lの9種類を表記しており、種類数が一番多い。①「漢字の韻尾による表記」はn, m, ŋ, lの4種類である。③「複合漢字による表記」は、末子音lのみである。

更に、モンゴル語の12種類音節末子音を、表記に用いられる三つの方式との対応関係から、次の4つのグループに分けてみることができる。

（1）音節末子音b, q, k, t, s, ʃ, tʃ, rは、漢字一字による表記方式のみである。

（2）音節末子音ŋは、漢字の韻尾による表記方式のみである。

（3）音節末子音n, mは、漢字の韻尾によって表記される以外に、漢字一字でも表されるケースがある。

（4）音節末子音lの表記には、三つの表記方式すべてが用いられるが、「漢字一字による表記」の出現率は93.55%で、圧倒的に高い。「漢字の韻尾による表記」は1.03%で、出現率が非常に限られている。これに比べて、「複合漢字による表記」は5.42%である。

おわりに

『元朝秘史』におけるモンゴル語の漢字音訳では、581種類の漢字によって、376種類のモンゴル語音が表わされている。全巻に亘って、漢字一字又は複合漢字によって表された音は延べ97761である。このうち、24993が特殊表記方式によって表されており、全体の25.57%を占めている。

『元朝秘史』の漢字音訳における特殊表記の規則をまとめれば、次の通りである。

（1）モンゴル語の声母（音節頭子音）が、破裂音qとふるえ音rの場合、qとrに一致する子音が音訳当時の漢語に存在しなかったため、その表記には、一般に次の①、②の二つの方式が用いられた。

①モンゴル語声母qの表記に圧倒的に多く用いられるのは、「Cm/q/ → (中)(Cc/x/)」という方式である。これ以外に、「Cm/q/ →(中)(Cc/k^h/, /k/)」という方式も見受けられる。但し、後者には、モンゴル語の意味に合わせるなど、音訳漢字を特定の語に使用する傾向が認められる。

②モンゴル語声母rの表記において、「Cm/r/ → (舌)(Cc/l/)」という方式が用いられる。但し、上述の規則には、「モンゴル語声母r →漢語声母l」と「モンゴル語声母l → (舌)(漢語声母l)」といった例外が見受けられる。この二つの現象の発生原因に関しては、小書きの「舌」の書き間違いによると、モンゴル語の「側面接近音l」と「ふるえ音r」の混同によるといった二点が考えられるが、今後の検討課題としたい。

（2）モンゴル語の音節末子音が、漢語の韻尾で表示できる場合、一般に「通常方式」で表記される。しかし、モンゴル語の音節末子音の種類が漢字一字で表記できるものより多いため、n, m, ŋしか持たない漢語の韻尾では表しきれない。そこで、音節を分解して

表 31．音節末子音の特殊表記の規則

規則	音対応の内訳（モンゴル語音→漢語音）
Em≡Cc	/n/→/n[i]/(你), /m/→/m[u]/(木), /l/→/l[ei]/(勒・泐・汋), /s/→/s[ï]/(思・恩)
Em/l/→Ec/n/	/l/→/n/
Em/l/→(Ec/n/)(Cc/l/)	/l/→(/n/)(/l[ei]/(勒))
Em±vo→Cc±as	/b/→/p[u]/(卜), /k/→/k^{h}[e]/(克), /t/→/t^{h}[i]/(惕), /tʃ/→/tʂ^{h}[i]/(赤), /ʃ/→/ʂ[i]/(失・室)
Em/q/→Cc/x/	/q/→/x[ei]/(黑)
Em/r/→(舌)(Cc/ɹ/)	/r/→(舌)(/ɹ[ï]/) (舌児), /r/→(/ɹ[ï]/) (児)

対応する特殊表記方式が用いられる。モンゴル語の音節末子音の表記における特殊表記の規則を、音対応の観点から公式化すると、上の表 31 の通りである。

なお、音節末子音の表記において、末子音 l の表記はユニークであり、「モンゴル語末子音 l →漢字韻尾 n」（伝統方式）、「モンゴル語末子音 l →漢語声母 l」（改新方式）、「モンゴル語末子音 l →漢語［韻尾 n + 声母 l］」（伝統 + 改新）といった三つの方式による表記がある。但し、三つの表記方式のうち、「モンゴル語末子音 l →漢語声母 l」という漢字一字による表記方式が圧倒的に多く用いられる。

参考文献

服部四郎 1946『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』東京：文求堂。

小沢重男 1984-1986『元朝秘史全釈』（上）（中）（下）東京：風間書房。

小沢重男 1987-1989『元朝秘史全釈続攷』（上）（中）（下）、東京：風間書房。

小澤重男 1994『元朝秘史』東京：岩波書店。

栗林均・确精扎布 2001『『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』仙台：東北大学東北アジア研究センター。

栗林均 2003『『華夷訳語』（甲種本）モンゴル語全単語・語尾索引』仙台：東北大学東北アジア研究センター。

栗林均 2006「『元朝秘史』におけるモンゴル語音訳漢字書き分けの原則―u/ü を表す漢字を事例として―」『東北アジア研究』10：75-92.

栗林均 2007「『華夷訳語』（甲種本）における同音漢字の書き分けについて」大東文化大学語学教育研究所『語学教育フォーラム第 13 号・華夷訳語論文集』：155-166.

栗林均 2012『『元朝秘史』傍訳漢語索引』仙台：東北大学東北アジア研究センター。

斎藤純男 2003『中期モンゴル語の文字と音声』京都：松香堂。

中村雅之 2003「華夷訳語凡例をめぐる覚書」『KOTONOHA』8：1-6.

更科慎一 2003「所謂甲種本華夷訳語の漢字音訳手法の一端」『人文学報』（東京都立大学）341：1-18.

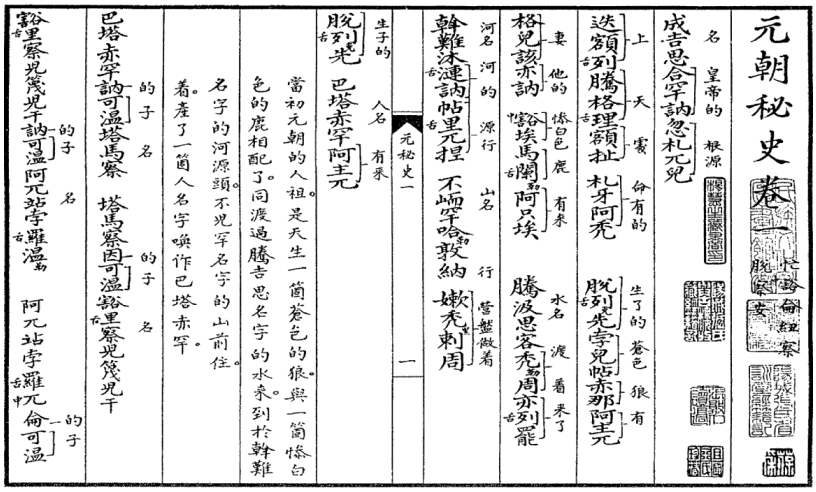
越智サユリ 2003「『元朝秘史』モンゴル語の音韻に関する研究」京都大学修士論文。

ムンフダライ（孟達来）2009「『元朝秘史』モンゴル語音節末子音の漢字表記に関する考察」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』No.1（2009）、グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言

語学教育研究拠点」、東京外国語大学（TUFS）大学院地域文化研究科。
張興唐 1975『元朝秘史三種』（據四部叢刊本葉德輝本十五卷本影印）京都：中文出版社。
陳垣 1934『元秘史譯音用字攷』北平：國立中央研究院歴史語言研究所。
照那斯图・杨耐思 1987『蒙古字韵校本』北京：民族出版社。
裘錫圭 2007『文字学概要―［後編］漢字の性質とその展開―』（早稲田大学中国古籍文化研究所文字学研究班訳）早稲田大学中国古籍文化研究所。
杨耐思 1981『中原音韵音系』北京：中国社会科学出版社。
杨耐思 1997『近代汉语音论』北京：商务印书馆。
Bayar 1980 *mongγul-un niγuča tobčiγan (1) (2) (3),* öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriγ_a, kökeqota.
Haenisch, E. 1937 *Mangḫol un Niuca Tobca'an (Yuan-ch'ao pi-shi): Die geheime Geschichte der Mongolen,* Leipzig.
Haenisch, E. 1939 *Wörterbuch zu Mangḫol un Niuca Tobca'an (Yuan-ch'ao pi-shi): Die geheime Geschichte der Mongolen,* Leipzig.
Halliday, M.A.K. 1959 *The Language of the Chinese "Secret History of Mongols",* Blackwell Publishing.
Ligeti, L. 1971 *Histoire secrète des Mongols*（Monumenta linguae Mongolicae collecta I）Budapest.
Pelliot, P. 1949 *Histoire secrète des Mongols: restitution du texte mongol et traduction francaise de chapitres* Ⅰ à Ⅵ. Paris.
Street, J. C. 1957 *The Language of the Secret History of the Mongols,* New Haven.

＊本稿は、富士ゼロックス小林節太郎記念基金 2008 年度外国人留学生研究助成および平成 23 ～ 25 年度科学研究費補助金（研究活動スタート支援 23820042）による研究成果の一部である。

キーワード　元朝秘史、モンゴル語、漢字音訳、特殊表記方式



付録［1］　四部叢刊本『元朝秘史』（第 1 頁）

原典字形	代用組み合せ文字	モンゴル語音
	中[窟＋鳥]	qu
	舌[目＋刺]	ra
	[目+刺]	la
	舌[刺＋齒]	ra
	舌[羊＋歴]	ri
	舌[馬＋羅]	ro
	舌[目＋盧]	rü

付録［2］　特殊漢字と組み合せ漢字の対照表

（Möngkedalai）